

## 十四歳の私にできること

学校法人佐藤栄学園栄東中学校 2年 小川 こはる

私の母は、ケアマネージャーという仕事をしている。高齢や病気、障がいなど何らかの理由で生活に支障をきたす人に、介護や医療などのサポートを結びつけて、その人らしく暮らすお手伝いをする仕事である。仕事をしていくうちに、社会から孤立している家族や、引きこもりの若者、働いても食べていくのに十分な収入が得られないなど、たくさんの問題を抱える家庭と直面するそうだ。自分たちに何かできることはないかと考え、今年四月に「とだっ子食堂」という子ども食堂を立ち上げた。残念ながら、コロナ禍にあり、今は食堂を開くことはできないが、第一歩として、学校給食で使われなかった多くの食材を配る、フードパントリーという活動を五月から始めた。私もその活動に六月から参加している。ひとり親家庭や生活に困っている子育て世帯を中心に呼びかけたところ、多くの反響があった。食材の他にも、絵本や問題集、文房具なども用意した。パントリー当日は、たくさんのお母さんと子どもたちが集まってくれた。その中には、一人で五人の子を育てているお母さんがいたり、あまり日本語が話せないお母さんもいた。私は配る手伝いをしたただけだが、小さな男の子が重たい物を一緒に運んでくれた。

「すごく助かる。」

「ありがとう。」

と言ってもらえたことがすごく嬉しくて、疲れも消えていくような気がした。まだ活動には二回しか参加していないけれど、自分の周りにも生活に困っている人はたくさんいることを知って、私にも何かできることはないか、考えるようになった。

子ども食堂の目的は、課題を抱えた人たちに地域の中での居場所をつくり、生きる力を育むことである。子ども食堂を他世代交流の拠点として継続的に活動することで、地域全体の力を高めることができるようになる。

今母たちは、大雨被害を受けた九州の食材を使って、

「子ども食堂、食べて九州を応援するぞ。」

と企業と相談しているそうだ。

自分の身の回りで起きていること、日本で起きていること、世界で起きていることを知り、自分とは関係ない、私は子どもだからとやり過ぎさず、自分に何かできることはないかを考え、行動に移す勇気を私も持ちたい。

今は、フードパントリーのお手伝いを続けようと思う。子ども食堂ができる時がきたら、子どもたちと一緒に遊んだり、勉強を教えてあげたり、おしゃべりをたくさんしたい。学校の友達にも声をかけて、仲間を増やしたい。一時的ではなく、継続して活動に参加し、私自身も成長していきたいと思う。